素敵な道草
― 民話めぐりウォーキング ―

狭山の民話を広めるプロジェクト　チームリーダー　横 山 美 衣

11月2日(金)、久しぶりに「民話めぐりウォーキング」を再開した。
第５回にあたる奥富地域の講師は、狭山市史編纂時の担当職員で狭山の生き字引、更に奥富ご在住の高橋光昭氏にお願いしたが、史実に関してもこのようなウォークに関してもエキスパートで、多くのご指導を頂いた。

広福寺「紅梅と将軍」→ 塩釜神社 →
八雲神社付近の馬頭観音「いぼ神様と
まめだわら」→ 柏井付近の民家の柿
「奥富のコウシュウマル」→
前田の弁天様 → 瑞光寺 →
梅の宮神社
４時間、およそ５kmの行程となった。

瑞光寺での高橋光昭氏

柏井地域に足を踏み入れると、何と、どの民家にも数本の柿の木が有る。たわわな実が、枝々を大きくしならせて、青い空に鮮やかなオレンジの絵を描いていた。これが「奥富のコウシュウマル」という話に伝わる柿の子孫らしい。
当時川越城に就任した甲斐の国（山梨県）のお殿様が、柿が無い事を嘆いて、1000本の柿の木を山梨から持ってこさせ、近隣の村々に配った。数年後、実った柿を各地から集め食べ比べたところ、奥富村のものが殊の外美味であり、奥富を優れた柿の育成地として愛でたというもの。「コウシュウマル」というのは品種名で、小ぶりの柿だ。

奥富の柿「コウシュウマル」を採るのを見る

どこからが私有地かわからないような開放的な家々の中の、ある柿の木の下で「奥富のコウシュウマル」は語られた。
現代でも「殿様から頂いた柿の木」として大切にされているという。しかし、採って食べる事は殆どなく、鳥たちのご馳走になるのだとか…。「もったいな～い。殿様が愛でたと言うコウシュウマルも、味見をしてみないと分からないよね～」などと、軽口を叩きながら、まだ柿の木の下でおしゃべりをしている人たちを待っていた。するとひとりが、広大な敷地の奥の方に建てられた母屋の方に向かってなにやら言ったのか、家人が出てきた。どうやら柿の採り方を教わっているようだ。
直径５cm 以上、長さ２m 以上もありそうな竹の棒の先を尖らせて２つに割ってあり、そこに柿の枝をはさんで、棒を回す事で枝をポキッと折るのだが、エコな高枝切鋏…というところか…。
「へ～、昔もちゃんとした知恵で適切な道具を作っていたんだな～」感心していると、いつのまにやら、いくつもの枝が折られていて、全員が採りたての柿を頂いた。
コウシュウマルの子孫は、素朴な甘さで、私達の心を柔らかく満たし、古と今をつないだ。そして地域の方とのこんなやりとりは、民話めぐりに優しい衣を纏わせ、丸でその場面そのものが民話の中の世界であるかのような錯覚を覚えた。